

## 俳句にカワイイを(前編)

高橋 真紀子

今、ニッポン発の「カワイイ」文化が国内外を沸かせていることをご存知だろうか。

ドラえもんやポケモンが海を渡って久しく、子猫のキャラクター、ハローキティの商品は100カ国以上で売られている。そして、空前のゆるキャラブーム。彦根市の「ひこにゃん」、熊本県の「くまモン」はご存知の方も多いと思うが、今や自治体がPRに独自のゆるキャラを持つのは常識だ。芸能界では秋葉原を拠点にした女の子のアイドルグループAKB48の人氣が社会現象に。「姉妹グループ」も活躍中で、その一つはジャカルタにある。そして若者のストリートファッション。ヒラヒラ、フワフワ、カラフルな装いは、欧米のアーティストにもうけているようだ。

こんな風に例を挙げると切りがない。ちなみにNHK総合テレビには、三月まで「東京カワイイTV」なる番組があつて、カワイイものを様々、発掘・紹介していた。

オンナ・子供のお遊びと笑うなかれ。世界で最も権威があると言われる英語辞典「オックスフォード辞典」のインターネット版には「k a w a i i」が載っている。堂々、外国語の仲間入りも果たしているのだ。

日本人は古来、工芸品や料理、菓子など、小さくて愛らしいものを生み、愛でてきたが、そんなDNAが進化したのが、昨今のブームなのかもしれない。日本が、経済力や国力を失ったと最近よく言われるが、文化力の方は、まだまだパワフルである。

それで考えた。俳句もカワイくなってみてはどうかと。

少々飛躍するが、正岡子規が俳句の手法に洋画の「写生」を取り入れたことは、明治初期の文化が急激に西洋化していったことと関係があると思う。時世の空気をまとうことは、あらゆる文化に、きっと俳句にも重要なことだろう。

現代の俳句界にも素敵な活動があった。黛まどかさんが率いた結社「月刊ヘップバーン」だ。都会に生きる女性たちが、恋や仕事、日常のひとこまを洗練された言葉で詠んだ。ミルクティー（秋）、ダイエット（夏）といった、新季語も提唱。ヘップバーンならば「カワイイ」をきっと見事に詠み込んだと思うが、残念なことに二〇〇六年に幕を閉じている。

カワイイは滑稽俳句になじむと思う。

カワイイものを見ると、人はふっと笑う。この感覚が、可笑しいに通じるからだ。また、滑稽俳句の重要な技法の一つである擬人化はカワイイと、とても関係がある。ある学者が語っていたが、人が動物の動きを見てカワイイと思うのは、往々にして人のような動作をした時なのだそうだ。これぞ擬人化である。

思えば、我が師匠、八木健会長の作品の中で、私の大好きな一句、

**お引越スマレは移植鰻に載り**

も「擬人化系カワイイ」である。 （次号へつづく）